

カンキツそうか病（病原菌：*Elsinoe fawcettii*）

○ 被害と発生生態

本病は糸状菌によって引き起こされる病気で、果実、葉、枝に発生する。若い葉に感染すると、病斑及びその周囲が盛り上がったいぼ型病斑となり、成葉に近づくと病斑部のみが盛り上がったそうか型病斑となる。果実も同様に小さな果実ではいぼ型病斑、肥大が進むとそうか型病斑となり、被害果実の商品価値は著しく低下する。なお、果実が小さい頃に激しく感染すると大部分が落果する。

病原菌の越冬伝染源は前年に葉や枝に形成された病斑である。春先に病斑上に形成された分生子が雨によって飛散し、新葉に感染する。新しい病斑では分生子の増殖が旺盛であり、二次伝染源となって周囲の葉や果実に感染する。

春葉における主な感染時期は展葉期から6月上旬までで、4月から5月に長雨があると発生が多くなる。また、果実における主な感染時期は5月中旬から7月下旬までで、それ以降は感染してもごく小さな病斑しか作らなくなり、実用上は問題なくなる。

本病は品種により抵抗性の程度の違いが顕著で、「温州ミカン」、「ユズ」は弱く、「せとみ*」、「ナツミカン」、「宮内イヨ」は強い。 *：山口県オリジナル品種

○ 防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・ほ場を定期的に見回り、発病した枝や葉を取り除く。
- ・伝染源となる抵抗性の弱い品種を園内に混植しない。
- ・窒素肥料を多施用すると発生が多くなるので、適切な肥培管理をする。

(イ) 薬剤防除

- ・薬剤散布は、発芽時（新芽が5 mm 程度）、5月下旬（灰色かび病との同時防除）、6月下旬に行う。
- ・ベンズイミダゾール系薬剤（ベンレート、トップジン M など）の耐性菌が県内で発生しているので、防除効果の低いほ場では他の薬剤を選択する。



葉（いぼ型病斑）



果実（いぼ型病斑）



果実（そうか型病斑）